

ペンシルバニア大学で看護を学ぶ アメリカ フィラデルフィア 2019年 3月10日～3月17日

4年生 尾形道隆、荻野正輝、金森由晃、西原菜帆



研修の目的

ペンシルベニア大学におけるプログラムに参加し、アメリカでの看護教育、病院の看護の実際を学ぶ。その際、各学生がそれぞれのテーマ

- ・精神科看護
- ・看護の多様性
- ・がん看護・緩和ケア
- ・身体障害者への日常援助のあり方 について学びを深める。

渡航先での旅程と活動内容

3月10日 東京出発

同日（現地時間）フィラデルフィア到着

3月11日 ～3月15日 ペンシルバニア大学にて、研修

3月11日 ウェルカムブレイクファスト、睡眠の講義

ペンシルバニア大学看護学部のカリキュラム、メンタルヘルス看護、ダイバーシティ、ケモセラピーについてのお話を伺う

3月12日

解剖学、宗教（イスラム）と女性についての講義

法医学精神科医についてお話を伺う

3月13日

がん療養病棟ツアーに参加、シミュレーションセンターの見学
老年看護ケーススタディ、PASE・コミュニティについて、健康決定とジェンダーについての講義

心電図、蘇生実習の見学、アジア学生連合のミーティングに参加

3月14日

構内・街中のバリアフリーの現状調査、大学病院にて看護実習に同行、IV実習の見学、お別れパーティー

3月15日

- ・生物医学図書館ツアーに参加

3月16日 フィラデルフィア 出発 3月17日（日本時間）東京到着

研修を通して学んだこと

- ・UPennNursingの規模感や充実度、学生教員のプライドなどは絶対的には強烈なものであり、純粋にかっこよさを感じた。
- ・一方で、学生教員の男女比や、学生との会話の中で垣間見える社会における看護の立ち位置は日本と似ていると感じる点も多かった。
- ・教育に関しては、本学科に比べると臨床・実践に割く時間が圧倒的に多いようであった。
- ・UPennの看護研究の充実度は、臨床との強い関わりからもたらされている面が多いにあるように感じた。今後看護研究に携わるのであれば、自分自身も臨床に身をおき研究とのコラボレーションとしての存在になりたいと感じた。

目的を達成できたか

担当してくださった先生とホストの学生の皆さんが私達の関心に合わせて講義やインタビューを用意してくださったお陰で、研修の目的を達成することができた。

グローバルな視点とは何か

- ・日本における現状をしっかりと理解した上で、他国の現状をありのままに理解し、その上で比較をすることで共通点や相違点を考えようとする姿勢。
- ・日本のもの＝世界共通の進んだものと固定概念で考えないこと。



上：サラ先生、ホストの学生と



左：大学病院がん病棟の病室で



下：実習センターの一室

将来の進路決定へどう影響したか

卒業後の進路が決まっていた段階での研修ではあったが、人々の健康に貢献できる存在でありたい、日本だけでなく世界に存在する患者さんのために、がんの効果的な新薬を生み出せるような存在になりたいと感じた。

反省点

- ・ディスカッションの中で、思いついたことがあっても英語でどう表現すればいいかわからずそのまま流れてしまうことがあった。現地の学生も先生も大変親切な人で、何か表現しようとすれば丁寧に耳を傾けてくれていたため、もっと物怖じせずに表現できればよかった。
- ・自分の進路に大きな影響を与えてくれるプログラムとなったので、もっと早い時期に行っておくと違う世界に飛び込んでいたかもしれない。と思う一方で、日本の制度や教育との比較しながら学べたことはとても大きく、その学びの充実のためには最終学年のこの時期というのはふさわしかったとも感じている。

後輩へのアドバイス

特にプログラムで行く場合、希望を自分から伝えないと目的からずれた研修になってしまう可能性があるため、自分から現地で(もしくは事前にメールなどで)しっかりと英語で希望を伝えることが出来るようにしておくことをおすすめします。

研修支援制度に望むこと

大変充実した研修でした。参加させて頂きありがとうございました。後輩の皆さんにも貴重な機会となるはずなので、これからもペンシルベニア大学におけるプログラムが継続されると嬉しいです。